

選ぶこと・選ばれること

長峰中 三年 田村咲葉

私は、『思春期特発性側わん症』という病氣を持って生まれた。

持って生まれたという表現はふさわしくもないかもしれない。この病氣が発見されたのは、十二歳七か月、小学六年生の冬だった。最初は六年の春、学校の内科検診でひっかった。まさに「ひっかかる」という感じで、この段階で次の検査を勧められた子は、まだクラスに何人かいた。次は、モアレ検査。その結果、多くの友人が異常なしと診断され、次の検査まで進む人数はほんのわずかになった。

「コンクールで勝ち抜くならともかく、こんなことで最終選考まで残りたくないねえ。」

冗談めかして、そんな風に話す母と笑い合えたのもここまでだった。最終視触診検査の残酷な結果は、専門の病院を紹介する紙一枚で私に伝えられた。側わん症専門の病院で撮ったレントゲン写真を初めて見たときのショックは忘れられない。腰の骨が二十七度の角度まで、ぐにやりと曲がっていたそれは、三百人に一人くらいの確率でしか発症しないくらいの酷い状態であることが告げられた。

幸せなことに選ばれるのなら、確率など関係なく嬉しい。しかし、このときばかりは、「なぜ私なのか」「誰が私を選んだのか」という絶望以外、感じられなかった。

そんな中、治療方針でとても気がかりなことがあった。背骨が曲がることを防ぐため、治療には脇の下から腰までをプラスチックで覆う、装具というものを一日中何年間もつけなければならぬ。しかし、私はこれを受け入れられなかった。なぜなら、私はヴァイオリンを弾くことを何よりも大切にしているからだ。体を自由に動かせない状態で、思い切り練習も演奏もできるはずがない。治療しないといけないのはわかる。しかし、何かの目に見えない力で病氣になることに選ばれ、ヴァイオリンを取り上げられることまで決められなければならないのか。

私は、『佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラ』という団体でヴァイオリンを弾いている。小学四年生で入団するまで、年に一回のオーデイションを何回も落ち続けた。練習しても練習しても選んでもらえなかった。でも、私はあきらめなかった。

合格する日を夢見て頑張り続ける日々を私が「選んだ」のだ。そうしてメンバーとなり、今年の夏はソコを弾かせてもらえるまで成長できた。ヴァイオリンのない生活なんて、私には選べない。

私は次の病院を訪ね、現在の主治医の先生に出会った。先生は私にこんな言葉をかけてくださった。

「側わん症を治すことが人生のすべてではないよ。この治療はマラソンと同じ。自分の納得のいく形で、ゆっくり頑張りついでいこう。」と。そんな先生に背中を押してもらい、私は自分で治療方法を選ぶことができた。二年半の間、寝ているときも学校にいるときも装具をつけ続けた。他人にじっと見られたり、いつも人の力を借りないといけなかったり、辛いこともたくさんあったが、自分で選んだのだからという意地が私を支えた。治療を通して、周囲の人たちの温かさに触れ、「この病気に選ばれたのも悪いことばかりではないな。」と思うことさえあった。

コンクール、オーディション、入試。人生はこれからも選ばれることの連続だ。努力が実って選ばれるものもあれば、病気のように望まなくて選ばれてしまうこともある。しかし、いつもどんな状況でも「選ぶ」という意志を失いたくない。「選ばれる」ことではなく、自分で「選ぶ」ことで自分らしい生き方は決まる。

側わん症とヴァイオリンは私にそんなことを教えてくれている。